

擬音語・擬態語の考察 — 『注文の多い料理店』を通して— An Analysis of Imitative Words in “The Restaurant of Many Orders”

清水 登、周 桂芳 Noboru SHIMIZU and Zhou GUIFANG

Abstract: Imitative words are more extensively used in Japanese language than in any other language. This paper analyzes the imitative words used in “The Restaurant of Many Orders” written by Kenji Miyazawa. From the viewpoint of styles, imitation words can be classified into the following six styles—basic word repeated style, long sound added style, syllabic nasal added style, double consonant added style, “ri” added style, and others. Miyazawa often and skillfully uses imitative words in his juvenile stories in describing humans and nature. By using imitative words he effectively represents sounds, behaviors, and mental states. This paper shows the concrete examples of the imitative words used by Miyazawa and takes consideration of their effects.

Keywords: imitative words

1. はじめに

宮澤賢治は作品の中に擬音語・擬態語を巧みに使える作家である。擬音語・擬態語を総称し、オノマトペと言う。宮澤賢治がオノマトペの達人であったとする言及が田守氏によって次のようになされている^(注1)。

宮澤賢治はオノマトペの達人と称されることがあるが、なぜそのような評価を受けるのだろうか。その理由の一つは、賢治のほとんどの作品にも、驚くほど多くのオノマトペが使われ、しかも使用されているオノマトペの種類が私たちが到底想像できないくらい豊富だからである。

本稿では、宮澤賢治の『注文の多い料理店』におけるオノマトペについて調査することにする。『注文の多い料理店』の広告文「実にこれは著者の心象に、この様な状景をもって実在したドリームランドとしての岩手県である」について「賢治が岩手県を基盤とした世界観を表現しようとして方言特有のオノマトペを用いたのではないだろうか」とする川越氏の指摘がなされており^(注2)、具体的表現を通し同作品に対しオノマトペがどのようなかたちで作品化に関わっているのかあきらかにしたい。

2. 擬音語・擬態語とは

擬音語・擬態語の意味について定義しておく必要がある。生活の中で発せられるさまざまな音として、汽車の音、モーターの唸り音、汽笛の鳴る音、さわやかな笑い声、涙にむせぶ声、ささやいた声および種々の動物の声がある。自然界で発せられるものとして風、雨、雷、電など人間の耳を通し聞こえる音がある。擬音語とは、「ほうほけきょ」「がたがた」など、鳥声や物音を写し取った言葉（自然の音声を言語音で忠実に直接的に模倣したもの）を指す。【彭飛 1985】では、『注文の多い料理店』の例を挙げ「どたっ」は重い物体の倒れる時の音、「ごんごん」は重い品物の墜落音を表し、硬そうな物体にぶつかった時の音を表し、「ざわざわ」はすごく騒乱している際の音を表し、「かさかさ」は落ち葉が風で飛ばされる音を表し、「タンターアン」は銃音を表すとの解説がなされている^(注3)。

擬態語とは、「べったり」「きらきら」など、様子や状態をいかにもそれらしく写し取った言葉（音響には直接関係のない事象の状態などを間接的に模倣し象徴的に言語音に写したもの）を指す。【彭飛 1985】では、『注文の多い料理店』の例を挙げ「すっかり」は残すところなくすべてにわたるさま、「ぶるぶる」は怖くて全身が震え、おびえたようなさま、「くしゃくしゃ」は恐怖や焦りのために顔も変わりしわだらけになったさま、「くるくる」は物体が軽やかに回転しているさま、「こそこそ」は陰でこっそり事を行うさまとの解説がなされている^(注3)。

3. 先行研究

【窪温子 1995】では、賢治の作品 30 作品を用いて、オノマトペの世界を音韻形態的に調査・分析し、音の組み合わせ方が独特であること、表記法（平仮名・片仮名等による）に変化があること、通常のおノマトペを非通常的に使うことによって読者に賢治のおノマトペは特別であるという感情を抱かせることを意図していることと結論付けている^(注4)。【王冠華 2003】では、『チェリストの高修』、『風の又三郎』、『滑ってベッドの山とクマ』という 3 作品を素材に、擬音語・擬態語の使用法や形式について着目し分析している^{(注5)(注6)}。【小笠原智子 2004】では、『どんぐりと山猫』、『狼森と笹森・盗森』、『注文の多い料理店』という 3 作品を素材に、擬音語・擬態語について語基反復型、促音付加型、り付加型、撥音付加型、長音化型、その他の 6 種に分類し統計表を作成している^(注7)。【川越めぐみ 2005・2007】では、賢治の童話・書簡などのオノマトペについて、語型・語基音・意味用法・統語などの側面から共通語と比較し、東北方言のおノマトペとどのような関係性にあるのか、考察している。その結果、緊密な関係にあることを実証している^{(注8)(注9)}。【河原修一 2006】では、『春と修羅』第 1 集に収められた心象スケッチ 69 編を対象としてオノマトペの形式《語根への接辞（促音、撥音、長音、流音プラス母音など）の添加、語根あるいは語根プラス接辞の反復》について分類・分析している。その結果、語根 2 拍型が 7 割、語根 1 拍型が 3 割、語根 2 拍反復型が 3 分の 1 を占めていることを実証している^(注10)。【田守育啓 2006】では、文学作品や新聞、広告、商品名の大量の実例を通して具体的に擬音語・擬態語の役割と特徴について分析している^(注11)。【大園菜央 2007】では、37 作品からオノマトペを採取し、用例数の多いオノマトペは ABAB 型、A っ B リ型、AB っ型であること、用例数が多いほとんどの形態が擬態オノマトペと擬音オノマトペで共有されていたこと、A っ B リ型と A ン B リ型は擬音オノマトペに存在しないことを実証している^(注12)。【田守育啓 2010】では、作品中のおノマトペについて慣習的オノマトペから派生した非慣習的オノマトペを音韻変化の結果であることを分析・解説し東北方言との関係性について言及している^(注13)。

4. 素材と方法

『注文の多い料理店』という童話を通じて日本語における擬音語・擬態語の特徴を考察しよう。

オノマトペの分類については、【小笠原智子 2004】における擬音語・擬態語の分類法にしたがい、語基反復型、促音付加型、り付加型、撥音付加型、長音化型、その他の 6 種類に分類し、語基反復型 28 例、促音付加型 5 例、り付加型 5 例、撥音付加型 6 例、長音化型 8 例、その他の型 1 例の計 53 例の結果を得、【小笠原智子 2004】の統計よりも 3 例（「わん (2)」「ぐわあ (1)」）多いこととなった。語基反復型は ABAB（語基一回反復型）合計 21 例、ABABAB（語基複数反復型）4 例、A ン A ン（撥音反復型）3 例である。

表 1：語基反復型

語基反復型の具体例	数	語基反復型の具体例	数
がたがたがたがた	4	くしゃくしゃ	1
ざわざわ	4	こそこそ	1
かさかさ	3	ごろごろ	1
くるくる	2	ずんずん	1
ごんごん	2	ぱちゃぱちゃ	1
ぶるぶる	2	ぴかぴか	1
がさがさ	1	ふっふっ	1
がたがた	1	ぺたぺた	1
きよろきよろ	1	合計	28

表2：促音付加型

促音付加型の具体例	数	促音付加型の具体例	数
ぎょっ	1	どたっ	1
じっ	1	ぼうっ	1
どうっ	1	合計	5

表3：り付加型

り付加型の具体例	数	り付加型の具体例	数
すっかり	2	びっくり	1
がたり	1	こっそり	1
合計	5		

表4：撥音付加型

撥音付加型の具体例	数	撥音付加型の具体例	数
がたん	1	ばちん	1
きちん	1	わん	3
合計	6		

表5：長音化型

長音化型の具体例	数	長音化型の具体例	数
どう	2	にゃあお	1
タンタアーン	1	ぐわあ	1
うう	1	ふう	1
くわあ	1	合計	8

表6：その他の型

その他の具体例	数		数
ふ（と）	1	合計	1

5. 考察

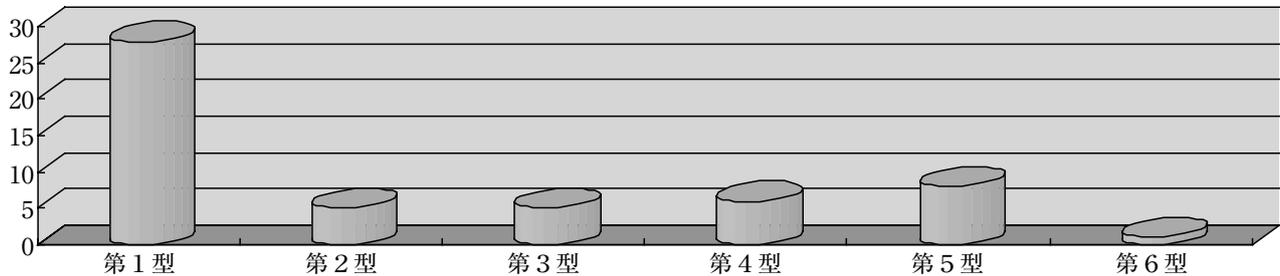
擬音語・擬態語の構造上の特徴は擬音語・擬態語の機能を考える上で極めて示唆的である。これらの表の結果から判断できることは、1音節ならびに2音節単独の擬音語・擬態語が少なく、ほとんどの擬音語・擬態語には促音、撥音または接尾語「り」が付いていることである。また、母音が長音化されることと語基が反復されることも擬音語・擬態語の特徴として指摘できる。

表1～6のように、擬音語・擬態語を6種の形式（第1、ABAB式の語基反復型、第2、ABッ、Aッの促音付加型、第3、ABり、AッBりのり付加型、第4、ABン、Aンの撥音付加型、第5、Aあ、Aうの長音化型、第6、その他の型）に分類し、そのうち第6種の数はいくつかであるため本稿では検討の対象とはしない。6種別の擬音語・擬態語の使用率を示したものが図1である。

図1が示す傾向としては、語基反復型の擬音語・擬態語がほぼ全体の半分以上を占めていることである。なぜ語基反復型の擬音語・擬態語はこんなに多く使用されているのだろうか。擬音語・擬態語とは現実の生

活音や自然音を模倣し、時間の経過の中で自然発生的に作られた語であり、その強調形式としてこの種の擬音語・擬態語が多くなることは当然のことと考えられる。擬音語・擬態語に反復型が多いのは日本語に限ったことではなく、朝鮮語やスワヒリ語の例を挙げ様々な言語に共通する普遍的な現象とする田守氏の報告がある^(注14)。

図1：6種類の擬音語・擬態語の使用率



次に語基反復型の擬音語・擬態語の特色について考えてみることにしよう。図2は語基反復型の擬音語・擬態語について語基の構成を類型化しその結果を数量化したものである。

図2：反復型の擬音語・擬態語について語基の構成を類型化したもの

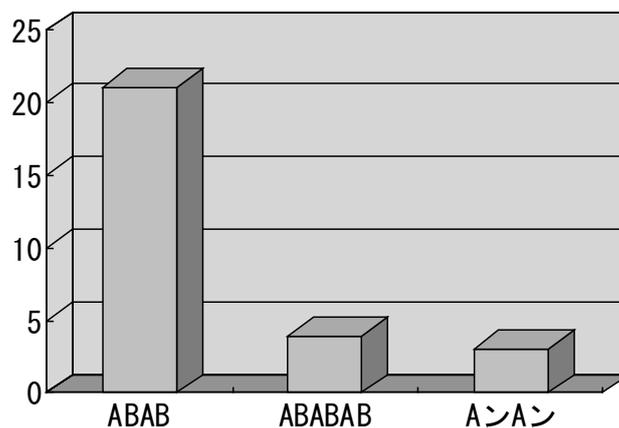


図2が示す傾向としては、ABABのような語基を単数反復する語基反復型が他の類型（複数反復型）より多いということである。ABAB型の語基構成は持続的な雰囲気強く感じさせる類型であり、「オノマトペの形式としては、同語反復が最もよく用いられる。オノマトペが時間性を含み、アスペクトとして継続が一般的であることによるとと思われる」とする河原氏の指摘がなされている^(注15)。反復型の基本型としてABAB型の使用頻度が高くなることは当然であると考えられる。

擬音語・擬態語を構成している語基の母音に注目し整理したものが次の表7である。母音「え」の擬音語・擬態語の例が極端に少ないことに気づく。母音「あ」と母音「お」の擬音語・擬態語の例が多いのである。

表7：母音「あ」、「お」、「え」が含まれる擬音語・擬態語

母音「あ」が含まれている擬音語・擬態語	がたがたがたがた、ざわざわ、かさかさ、がさがさ、がたがた、ばちゃばちゃ、がたり、がたん、ばちん、わん
母音「お」が含まれている擬音語・擬態語	ごんごん、きょろきょろ、こそこそ、ごろごろ、ぎょっ どうっ、どたっ、ほうと、こっそり、どう
母音「え」が含まれている擬音語・擬態語	ぺたぺた

「〔a〕音が開放的で全体にわたるのに対し、〔o〕〔u〕〔i〕音は順により閉鎖的で部分に限定される」とする河原氏の指摘がなされている^(注16)。また、母音「え」の擬音語・擬態語はわずか1例のみであった。「一方、／e／は『げーげー』『けらけら』のように、不適切さや下品さを表し」との田守氏の見解が示されており^(注17)、そのことが擬音語・擬態語の出現率に影響をあたえたものと考えられる。

語基反復型、促音付加型、り付加型、撥音付加型、長音化型の6種について例文を挙げ比較することしよう（本文は『[新]校本宮澤賢治全集』第十二巻・筑摩書房・1995年による。）^(注18)。

A 語基反復型：

- (1) 二人は帽子とオーバーコートを手で釘にかけ、靴をぬいでぺたぺたあるいて扉の中にはいりました。
- (2) 「その、ほ、ほくらが、……うわあ。」がたがたがたがたふるえだして、もうものが言へませんでした。
「ぺたぺた」、「がたがたがたがた」という二つの語基反復型の擬音語・擬態語は持続的な感じならびにリズムの強さが認められるのである。「ぺたぺた」は素足で地上を歩く音で、二人の紳士が帽子とオーバーコートを手で釘にかけ、靴を脱いで素足でぺたぺた歩いて扉の中に入ったわけである。「がたがたがたがた」はもともと激しく震えるさまを表す擬態語であり、『注文の多い料理店』ではお客様の要求が特に多いと知り、お客様に対し料理しようとした時の二人の紳士の恐怖に慄き震えるさまを表している。「がたがたがたがた」はその持続的な恐怖を表している。

B 促音付加型：

- (3) はじめの紳士は、すこし顔いろを悪くして、ぢっと、もひとりの紳士の、顔つきを見ながら云ひました。
- (4) なるほど立派な青い瀬戸の塩壺は置いてありましたが、こんどといふこんどは二人ともぎょっとしてお互にクリームをたくさん塗った顔を見合せました。
- (3) と (4) の「ぢっと」「ぎょっ」の促音付加型については「促音 T は時間的な短さ・速さだけでなく、緊張感も示す」とする河原氏の指摘があり^(注19)、ともに緊迫した雰囲気醸し出している。

C り付加型

- (5) 壺のなかのクリームを顔や手足にすっかり塗ってください。
- (6) 戸はがたりとひらき、犬どもは吸い込まれるやうに飛んで行きました。
- (5) の「すっかり」は残すところなくすべてにわたるさまを表す擬態語である。(6) の「がたり」は重い物がぶつかってたてる音や物が急に動いたり、落ちたり、変化したりするさまを表す。り付加型は「流音プラス母音『り』(古くは『ら』も) R は、主体をめぐる環境・状況を示す」とする河原氏の指摘がなされている^(注20)。

D 撥音付加型：

- (7) 二人はびっくりして、互いによりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。
- 撥音付加型は「撥音 N は瞬間・余韻だけではなく、共鳴・共感などを示す」とする河原氏の報告がある^(注21)。その音と動作とは単一的な関係ではなく、共鳴現象が伴っているのである。両紳士はびっくりして、互によりそって扉を開け次の室へ入って行ったのである。(7) の「がたん」は不安な気持ちで扉を開けるさまを表現したものと考えられる。

E 長音化型：

- (8) 鍵穴の眼玉はたちまちなくなり、犬どもはううとうなってしばらく室の中をくるくる廻ってみましたが、また一声「わん。」と高く吠えて、いきなり次の扉に飛びつきました。
- (9) 犬がふうとうなって戻ってきました。
- 長音化型の擬音語・擬態語も強調的感じが認められるのである。「うう」であれ「ふう」であれ、2匹の犬の吠える声を強調的に写し取っているのである。長音化型は「長音化：は、時間的長さ・遅さや慣習的続行だけでなく、注意深さ思い入れ、強調などを示す」とする河原氏の指摘がなされている^(注22)。

以上、様々な様式の擬音語・擬態語を持つ特徴について分析した。しかし、一つの文の中には一つの擬音語・擬態語だけではなく、いくつかの擬音語・擬態語が共存する例が多く、宮澤賢治の作品は特にそうである。例文を挙げ分析することにして。

(10) 風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はかさかさ、木はごんごんと鳴りました。

この文を読むと、まるで映画を見ているようであり、「ごんごん」、「かさかさ」、「ざわざわ」は語基反復型の擬音語で、風が絶えず吹いて葉と幹が震えている光景を効果的に表現している。「どう」は長音化の擬音語であるが、強調的な役割を果たしている。一切の光景を眼前にして、このような神聖な領域を感じさせる自然景色の描写により効果的に擬音語・擬態語の役割が十二分に発揮されている。宮澤賢治は風、草、木の葉、幹もまるで生物のように描写している。擬音語・擬態語を通じていきいきした自然が眼前に展開する。宮澤賢治は擬音語・擬態語の効果的運用が巧みで、語感的に優れた作家と言っても過言ではない。

(11) 鹿の黄いろな横つ腹なんぞに、二三発お見舞もうしたら、ずるぶん痛快だらうねえ。くるくるまわって、それからどたっと倒れるだらうねえ。

(11) のなかに擬音語・擬態語が2例あり、「くるくる」は語基を反復することにより持続的な感じを強めている。「どたっ」は促音付加型で、瞬間的な場面での、大きくて重い物体が倒れ、落下する際の音を表している。「くるくる」は、鹿が激しく回っている様子、「どたっ」は瞬間的に鹿が倒れるときの音である。獲物は銃で傷を負って倒れ、擬音語・擬態語により効果的にその場面の雰囲気が表現されている。

(12) ブラシを板の上に置くや否や、そいつがぼうっとかすんで無くなって、風がどうっと室の中に入ってきました。二人はびっくりして、互いによりそって、扉をがたんと開けて、次の室へ入って行きました。

「ぼうっ」も「どうっ」も促音付加型擬態語、擬音語である。「ぼうっ」はほんやりとした、はっきりしていない雰囲気を表して、「どうっ」は、風が室の中に入ってくる音を表している。「ぼうっ」はブラシを板の上に置くや否やブラシがかすんで、視界から消えるさまを表している。促音付加型の擬音語・擬態語はスピード感を伴った一回限りのあるいは瞬間的な動作を象徴的に表現する。風がどうっとうと室の中に入って、「どうっ」は風のスピードの速さを象徴的に強調している。広々としている場所から風が急速に吹いて小さな家に入ると自然と風の力が強くなり、風の音も激しさを増す。「びっくり」は驚いたさまを表し、二人の紳士は使っていたブラシをもとに戻し、そのブラシが視界から消えて見えなくなるほど彼らには一瞬の出来事であったのである。「がたん」は硬い物が互いに衝突した時の音である。先に述べたように、母音「あ」が含まれている擬音語・擬態語は音の明確さを伴う軽快な感じをもたらす。撥音には共振・共鳴感が漂っており、音と動作とが単一ではなく、共鳴できる現象を伴う。二人の紳士は、驚いて互によりそって、急いでドアを開けようとする姿がイメージされる。四つの擬音語・擬態語は全体の文に効果的に働きかけ、読者に対し具体的なイメージを膨らませ、宮澤賢治は擬音語・擬態語の達人と言っても過言ではない。

(13) 二人の若い紳士が、すっかりイギリスの兵隊のかたちをして、びかびかする鉄砲をかついで、白熊のような犬を二疋つれて、だいぶ山奥の、木の葉のかさかさしたところを、こんなことを云いながら、あるいてをりました。

これは作品の冒頭の文である。この文に作者は三つの擬音語・擬態語を使っている。すなわち「すっかり」、「びかびか」、「かさかさ」である。それぞれり付加型と語基反復型に属している。「すっかり」により二人の紳士が疑いの挟む余地がないほどにイギリスの兵士であることを明確なかたちで表現している。「びかびか」はキラキラした姿を表し語基反復型である。語基反復型は持続的な感じが強い。二人が肩にする鉄砲のもつ輝きは獲物を狙う武器としてのイメージを強く感じさせる。なお、「びかびか」については「共通語では、連続して光っている状態も点滅した光り方も『びかびか』というオノマトペで描写されるが、岩手方言では、前者を『びかびか』が、後者を『ぺかぺか』が用いられている」とする岩手方言と宮澤賢治のオノマトペとの関係性に言及した田守氏の指摘がなされている^(注23)。「かさかさ」は彼らが山奥を歩いて落ち葉を踏んだ時の音を表しており、山奥の雰囲気を強く感じさせる。この三つの擬態語・擬音語により作品冒頭の場面が鮮やかに眼前にイメージされるのである。

6. まとめ

日本語の擬音語・擬態語の豊富さ、利用頻度の高さ、これらは日本語における言語上の特質を示すものと

いえる。『注文の多い料理店』における擬音語・擬態語の、語基を構成する母音による分類と語基反復型、促音付加型、り付加型、撥音付加型、長音化型、その他の6種による分類を通し、それぞれの使用頻度や用法上の特徴について分析した。その結果、語基を構成する母音については、[a] [o] の使用例が多く、[e] の使用例が少ないこと、語基反復型は使用頻度が高く、持続的なさまを表すこと、促音付加型と長音化型はともに強調感を表すこと、とくに促音付加型は瞬間的なあるいは緊張感に満ちた場面に関係すること、り付加型は主体をめぐる環境・状況を示すこと、撥音付加型は共振・共鳴現象を生成することなど、先行研究《宮澤賢治とオノマトペ》で示されている内容を裏付けることができた。また、複数の擬音語・擬態語が共存する例の表現についても分析し、巧みな表現効果が発揮されている実態について裏付けることができた。

- (注1) 守育啓『賢治オノマトペの謎を解く』(岩波書店, 2010年・5ページ。)
- (注2) 川越めぐみ「東北方言から見た宮澤賢治の童話のオノマトペ」(『文芸研究—文芸・言語・思想—』第168集・2007年・10ページ。)
- (注3) 彭飛『日本語の擬音擬態語簡析』(北京:商務印書館, 1985年・1~146ページ。)
- (注4) 窪温子「宮澤賢治のオノマトペの世界」(『研究紀要』NO. 34・1995年。)
- (注5) 王冠華「宮澤賢治の童話から擬音擬態語について」(『日本語学習と研究』, 2003年, 第1期・77~80ページ。)
- (注6) 王冠華「中日古代の擬音擬態語の対比と研究」(『北京第2外国語学院学報』, 2005年, 第6期・120~127ページ。)
- (注7) 小笠原智子編「宮澤賢治の童話でのオノマトペ(苏讯江訳)」(『日本語知識』, 2004年, 第5期3~4ページ。)
- (注8) 川越めぐみ「東北方言オノマトペの特徴についての考察—宮澤賢治のオノマトペの場合—」(『言語科学論』第9号・2005年。)
- (注9) 川越めぐみ「東北方言から見た宮澤賢治の童話のオノマトペ」(『文芸研究—文芸・言語・思想—』第163集・2007年。)
- (注10) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(『金沢大学国語国文』第29号・2006年。)
- (注11) 田守育啓『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』(岩波書店, 2006年。)
- (注12) 大園菜央「オノマトペの研究」(『筑紫語文』第16号・2007年。)
- (注13) 田守育啓「宮澤賢治特有のオノマトペ—慣習的オノマトペから音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ—」(『人文論集』第44集第1・2号・2009年。)
- (注14) 田守育啓『オノマトペ擬音・擬態語をたのしむ』(165ページ。)
- (注15) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(69ページ。)
- (注16) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(69ページ。)
- (注17) 田守育啓「宮澤賢治のオノマトペ—慣習的オノマトペから音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ—」(『人文論集』第40巻第1・2号・80ページ。)
- (注18) 『[新]校本宮澤賢治全集』(第十二巻, 筑摩書房, 1995年。)
- (注19) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(70ページ。)
- (注20) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(70ページ。)
- (注21) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(70ページ。)
- (注22) 河原修一「宮澤賢治の心象スケッチにみるオノマトペ(その1)」(70ページ。)
- (注23) 田守育啓「宮澤賢治のオノマトペ—慣習的オノマトペから音韻変化により派生した非慣習的オノマトペ—」(80ページ。)

(長野県短期大学 多文化コミュニケーション学科 日本語日本文化専攻 清水 登、
長野県短期大学 客員研究員・中国湖南省衡陽市桜花日本語専門学校校長 周 桂芳)
(連絡先 〒380-8525 長野県長野市三輪8-49-7
TEL 026-234-1221 FAX 026-235-0026)
(平成24年10月1日受付、平成24年12月13日受理)